

The Danube Quarterly

ドナウ通信



2007(平成19)年・夏季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin

Cover Illustration Copyright © 2007 by Inner Design Bt, Budapest
Photo copyright © 2007 by Tamás Kármán
Edited by Tsuneo Morita
Published by Japanese Community in Hungary

目次

運動部情報

釣り部	初釣り報告	関本 正	1
	初めて参加しました	和波 拓郎	1
	これははまります	野村 英陽	2
テニス部	ウィーンと交流戦	的場 英門	3
ランニング部	リレー競技に活躍	盛田 常夫	4
	日本人学校のリレー参加記	飯川 浩二	5
	久世 優美子・沼田 尚子・鈴木 沙季・船山 聖奈		
	小松 愛・山下 芽惟・石川 由佳子・小林 亜海		
	布留川 麻衣・橋本 直樹・松下 隼也・島戸 優輝		
	ハーフマラソン感想記	西田 友実	14
	ウィーン・ハーフマラソン参戦記	盛田 常夫	16

ソフトボール大会	大善戦、大使館チーム	戸田 公司	20
日本人学校	小林先生来校	三代 喜政	22
創作			
第十話 ふぐ		岩井 孝博	23

運動部情報

釣り部

初釣り報告

関本 正

二〇〇七年度釣り部初釣行を先日六月一六日～一七日に行いました。場所はいつも通りのオーストリア、シュタイアーマルク州ムーラウ近郊の Etrachsee、別名「爆釣の湖」です。

総勢7名、紅一点のK嬢も参加です。経験者4名に初心者3名という面子でしたので、ボート3艘に経験者と初心者の組み合わせで乗り込みます。外れの経験者1名は陸からのキャスティングでの釣りでした。

皆さん数え切れないほどイワナを釣ったようです。尺物も大分上がりました。また、K嬢は四〇cmを超

えるニジマスをかけたのですが、大きすぎてボートまで上げられず、あと一歩のところで逃げられたそうです。

昨年と違い、パスポートを忘れるとか、道具を湖に沈めるといったハプニングもなく、万事無事終了致しました。楽しい釣りに、新鮮な空気、美味しい食事と週末を楽しく過ごさせて頂きました。

ところで、今年の釣り部部長のこれまでの成績はオーストリア・Fischach川での四四cmのブラウントラウトです。今回の爆釣の湖では三三cmのニジマスが最大で、ど素人のK嬢にも負けてしまいました。次回釣行でリベンジです。



初めて参加しました

和波 拓郎

釣り部の活動にはじめて参加しました。実は、私は結構な釣マニア。子供の頃は祖父に釣られてハゼ釣り、大学に入ってからルアーフィッシングとフライフィッシングにはまりました。特に社会人になり、香川県に赴任していた頃は溪流から溜池、堤防、船と毎週のように出かけては釣りを楽しんできました。

さて、今回の1泊2日の釣行ですが、一言でいうと「最高!」でした。少しヒンヤリとした新鮮な空気と美しい湖、まるで映画のワンシーンのようなロケーションは、赴任して約2ヶ月、週末はDVDか家族とスカイプをするという生活が続いていた私の気分を一気にリフレッシュさせてくれました。

また、湖の魚影の濃さが半端ではない。フライフィッシングというの

は結構難しい釣りで、河口湖や芦ノ湖に行った時も1日2〜3匹連れれば「よかったね」という感じでしたが（腕の問題はありますが・・・）、今回は違いました。フライ（疑似餌）を一生懸命に遠投しなくても、水に流してボートをこいでいるだけで魚がパクツ、パクツと食いついてくる。まさに関本部長いわく「爆釣の湖」です。

そして、夕食と昼食でいただいたイワナのムニエル？も最高に美味しかったです。

最後になりますが、今回の釣行をアレンジしてくださった関本部長をはじめ、一緒に釣った釣り部の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

次回の釣行がいまから楽しみです！



これはハマります

野村 英陽

キャストイングしてから僅か数分。たるんでいた糸がピンと張り、ロッドがギュツと撓る。瞬間、ロッドを勢いよく立て、合わせる。手ごたえありっ！

リールを巻いて、引き上げた魚はイワナ。この湖での当たり度No.1フィッシュ！

ところで、ここはオーストリア中南部、四方を山に囲まれた大自然の中の湖。釣り経験はほぼゼロ、しかし誰にも釣れるとの噂を聞き、半信半疑でこの釣行に参加。

最初、湖畔でほんの数十分、キャストイングを指導していただき、それからいざボートで湖上へ。

数時間後、釣ったイワナの数はいくつ知れず。

まさに入れ食い状態。

フライフッシングという新しい遊びを覚えた瞬間でした。

これはハマります！

テニス部

ウィーンと交流戦

的場 英門

六月九日、ブダペストとウィーン在住日本人テニス部員による交流試合が開催されました。

ここ最近、ブダペストのテニスチーム（3チーム）の間ではよく交流試合をやったりお互いの練習に参加したりし、レベル・モチベーションのアップを図ってきました。今回は国際ゲームということで、さらにモチベーションが上がり、私自身も家族サーブスそちのけで土・日を練習に費やしました。

今回の交流試合には参加出来なかった実力者もいらっしゃいましたが、ブダペスト・チームは最強精鋭が揃いました。

当日、ウィーン・チームの皆さんと対面した印象は、「皆さん、上手そ

う！」。

挨拶・着替えを済ませ、練習開始。

ブダペスト・チームの皆さんはいつものように調子よくストローク・ボレー・スマッシュ・サーブの練習をし、ウォームアップ完了。

次にウィーン・チームの皆さんの練習開始！「ムムツ？え？」そんなんです、ウィーンの皆さん、かなりハイレベルな方々ばかりでしばらく練習に見とれてしまい、実際に試合するという事をすっかり忘れてしまっていました。

今回の交流試合にはブダペスト・チームは男性7名、女性1名、ウィーン・チームは男性10名、女性2名が参加されました。その他、練習のみ参加された方や、応援に来てくださった方も沢山いらっしゃいました。試合結果は、男子ダブルス6試合、ミックスダブルス2試合の計8試合で、ブダペスト2勝、ウィーン6勝の完敗でした。（涙）

試合結果は非常に残念でしたが、ウィーン・チームのみなさんのテニスに対する取り組み方やチームワークの良さを目の当たりにする事が出来、ブダペスト。チームのみなさんの目の色が変わり、今回の交流試合を楽しむに日々練習に励んでいます。テニス部は伝統的に、上級者グループと中級・初級者グループが別々にグループを組んで楽しんできました。しかし近年、上級者グループの人数が減り、他方で中級者グループの実力が上がったために、両グループのレベルは接近し、実力的に大差ない状態になっています。

テニス歴の長い人は上級者グループ（日曜午後）、テニス歴の浅い人は初中級グループ（日曜午前）という目安になりますが、両方のグループに参加しても何の問題ありません。それぞれのグループに顔を出して、一度、どれほどのレベルのか、確認されることをお勧めします。

ランニング部

リレー競技に活躍

盛田 常夫

今年最初のロードレースとなった四月二二日のT・C・O・M大会には、木村晶子さん、西田友実さんが六・五kmに、私が一二kmに出場しました。その一週間後のウィーン・ハーフラソンには、西田さんと私の2名が参加しました。その参加記を掲載しました。来年も四月に予定されている華やかなウィーンの大会に、是非、参加されることをお勧めします。

さて、五月一九日に開催されたフローラ女子大会には、一・五km x 3のリレー種目に、日本人学校から3チーム出場しました。このレースはエキジビションのため、正式なタイム計測はありませんが、大人のチ

ームや女装した男子チームに混じって、上位でゴールしました。かつらをかぶった男子がゴールする毎に、主催者が男子は順位から除外しますとアナウンスしていましたが、目くじらを立てることなく、参加者も余興のように楽しんでいました。日本なら主催者が目の色を変えて問題にするところですが、ご愛敬というところでしょうか。

このレース参加で、日本人学校チームが盛り上がり、六月三日のK & Hマラソンリレー大会でも、やはりエキジビションのミニマラソン(二・一km x 3)に、2チームが参加し、橋本・松下・島戸の日本人学校Aチームは、見事、男子六五チーム中一四位でゴールしました。男子一般のマラソンリレーでは、日本・ハンガリー友好チームAが、二時間五八分一五秒で一六位(四五一チーム中)、Bチームが三時間二〇分五秒で六七位に入りました。

女子一般のハーフラソンリレーでは、Cチームが一時間四九分三一秒で八位(五一チーム中)、Dチームが一時間五五分三七秒一六位でゴールしました。

この一週間後に開催されたゲータレード一〇km記録大会には、盛田、木村、西田の三名が参加しました。記録は次の通りです。

盛田 常夫 四四分八秒

木村 晶子 五四分〇秒

西田 友実 一時間一分四〇秒

まさに炎天下、三〇度の暑さの中、無事ゴールしました。このレースで夏前の大会は終わり、九月二日には国際ハーフラソン大会、九月三日には国際マラソン大会が開催されます。ハーフラソンには、日本人から盛田、木村、西田に加えて、日本人学校の飯川先生、辻先生が出場します。また、仲川・兼子先生がリレーに挑戦します。皆様のご声援をお願いします。

日本人学校のリレー参加記

飯川 浩二

本年度は、五月一九日の女子リレー・マラソン大会に3チーム9名、六月三日のミニマラソン大会に4名の児童生徒が参加しました。参加は希望制でしたが、参加児童生徒の保護者や兄弟、友だちまで大勢応援に駆けつけてくれたおかげで、日本人学校チームは会場内で大きな注目を浴びました。参加した児童生徒、応援してくれた方々にとって、日本国内では味わいにくい「お祭り」雰囲気いっぱいのマラソン大会は、きっと大きな思い出になったことと思います。

さて、日本国内では、小・中学生のマラソン大会はあまり多くありませんので、ほとんどの児童生徒は初出場でした。というのも一時期、中・長距離走の運動中に事故が続いたことや授業時数の確保から、多く

の学校、地域で次々とマラソン大会が縮小・廃止されてしまったからです。また現在の学習指導要領の小学校体育では「持久走」は「陸上運動」ではなく「体づくり運動」という新しい領域で、体力を高める運動として取り扱っています。ですからリレー・短距離走のように競争としての扱いをしないのが普通です。

しかしマラソンは生涯スポーツとしては最適です。小学校段階から体力向上はもちろんのこと、マラソン自体の楽しさを味わわせることはとても大切なことと思います。だからこそ今回のようなマラソン大会は長い距離を走ろう、練習しようという大きなモチベーションなり、大変効果的です。そして多くの児童生徒が作文にも記しているように、一度参加したら「また来年も」という気持ちにさせられてしまいます。今後の大会では、保護者の方々も児童生徒の応援だけではなく、子供と

一緒になって参加してくだされば、さらに盛り上がると思います。最後に、日本人学校チームの参加・応援に多大なご支援をいただいた盛田さんに、チームを代表してお礼を申し上げます。

初めてのマラソン大会

久世 優美子

「3・2・1」

このときから私の胸は高鳴り始めていた。

私はこの日、初めてマラソン大会に出た。結構大きな大会だったこともあり、私の心の中は大爆発しそうだった。

私は第三走者だったので、順番を待っている時間が十四分間あった。この時間はとても長く、そしてあっという間だった。この間、私はずっと胸がはちきれそうだった。しかし、

そんな中でも友だちの応援は精一杯した。

そしていよいよ私の番が回ってきた。そのとき、私自身の目標がふっと頭に浮かび上がった。そして、目標達成のために全力を尽くしていた。それでも、走っている時間がとても長いような気がした。いつもより何十倍も走っている気がした。しかしそんなことを考えている間にゴール地点が見えてきた。が、ここからも結構距離があった。みんなが応援してくれているが、その声が耳に入らなかった。このときすでに疲れていたが、私はゴールに向かって最後の力を振り絞った。最後、走っていたか分からないが、疲れていたことはびっくりするほどよく分かった。

私はここハンガリーでマラソン大会に出られた自分がとても幸運だった。チームのメンバーと一緒に練習し、この日までみんなで頑張れ

たことは、いい経験になった。そして、これからも地域の行事を大切に、たくさん参加したいと思う。

何となく参加して

沼田 尚子

マラソン参加申込書の紙が机の上に置かれた。

「今年もか・・・」

そうつぶやきながら私は、紙を取って無意識に読み始めた。

「今年もいいか・・・」

家に帰ってゴミ箱の中に捨てられるはずだったマラソン大会申込書が、今になって活躍するとは知らなかった私は、ファイルの中に粗末に押し込んだ。

数日後、私はまたいつものクセを出してしまった。それは、何かの申込書がきたら何も考えないで申し込んでしまうこと。漠検だって、英

検だってそう。申し込んだ後から後悔する私であった。運動神経ダメダメな私が、一・五キロ完走できるか心配だった。

でも私には目標が二つあった。それは、完走することはもちろん、友達に迷惑をかけない事。それができれば、自己満足という事にしておいて、昼休みのハードな練習が始まった。お弁当の後なので、お腹が痛くなったり、暑かったので、熱中症になりかけたりしたけれど、日に日に練習を積み重ねることで、だんだん慣れていった。

中でも一番印象的だったのは、辻先生の飼い犬だとかん違いして、どこかの野生の犬と仲良く走って、すぐく速く走れたことだった。

当日、空はギンギン太陽が地面を熱していた。会場に到着して、すぐなぜか写真をパシャパシャ撮った。そして、兼子先生と皆とトレーニングで走った時は、本当に暑くて倒れ

そうになった。

私は、第二走者だったが、走るだけなのに、緊張してしまつて、どうしようかと思つた。

クラスメイトも、わざわざ暑い中、応援に来てくれて、とてもうれしかった。

いよいよ私の手にバトンが渡つた。

「なっぴー！がんばれー！」

私の耳に友達の暖かい応援が響いてきた。

騒がしいスタートラインから走つて三分くらいのところは、もう、ウソの様に自然がたくさんあつて、小鳥が鳴いていた。

「あ・・・ヤバ・・・もう息が荒くなつてきた・・・」

まだ半分も走っていないのに。

でも、他の人も私より息が荒いことに気付いた。皆一緒に苦しんでいるな・・・

ゴール地点の三十メートルくらい前で全力ダッシュした。

初めてのマラソン大会で、一・五キロを完走した。でも私は、疲れ果てて、嬉しさも喜びも何も感じなかった。ただ、会場でもらつた溶けてドロドロのアイスをくわえたまま、棒になった足を、見つめていた。

私つてこんなもんなのだ・・・と、自分自身を知る事ができた機会でもあつた。

帰りに、飯川先生におごつてもらつたアイスが特別おいしく感じたのは、たぶん本当に楽しく感じた事と、大勢の友達とアイスが食べれたからだと思つた。

来年は、もっとレベルアップした、二・一キロのマラソンに参加したいと思つている。この機会に出会えた事を誇りに思つている。

来年もでようかな

鈴木 沙季

私は、マラソンがあまり好きではありませんでした。しかし、尚子さんと優美子さんにさそわれて、やつてみようかなと思ひやりました。

1・5^分も走ると聞いたときは、正直「大丈夫かな」と思ひました。練習は、坂道や階段があつてけっこうきつかったです。でも、みんながんばつていたので私もがんばろうと思ひました。

本番当日、私は集場所まで迷つてしまいました。先生に来てもらいなんとか集合場所にいました。着いてすぐ走る順番を決めました。

私は、1番目に走ることにになりました。アップをした後、スタート地点に行きました。スタート地点は、音楽でとてもうるさく、始まるまでが長く感しました。やつと始まつたと思うと、みんなすごい勢いで走つて

いてすごくビックリしました。最後の方は、自分が思っていたよりも長くてとてもつかれました。私から尚子さんにバトンが渡った時は、すごくホッとなりました。応援していたら、アフロをかぶった男の子が走っていたのにもビックリしました。最後の優美子さんが、いつもより速く走りますが、思いました。

結果は、アフロの子達を除いて6位か7位くらいと聞いたとき、とても嬉しかったです。最初は、やだなと思っていたけど来年も出たいなと思いました。

待っていたマラソン大会

船山 聖奈

私は、ハンガリーに来て、初めてマラソンに参加しました。

前の学校では、毎年秋にマラソン大会がありました。日本人学校では、マラソン大会がないと聞いてと

ても残念でした。なぜかというところ、マラソン大会は、賞状をもらえる滅多にないチャンスだったからです。去年、友達が参加したので、この大会のことは知っていたし興味を持っていたので、四月頃、友達に、「リレーマラソンに出ない？」

と誘われた時、とてもうれしかったです。リレーでのマラソンは、初めてなので楽しみでした。

しばらくすると、週に三回昼休みに走るようになりました。走ってみると、結構楽に走れました。いつも体育で、2 km 位走っているのので、1・5 km なら楽勝だと思いました。

そしていよいよ本番になりました。私達のほかにたくさんハンガリー人がいて、驚きました。

いよいよスタートです。私は二番目に走りましたが、とてもきんちょうしました。一番に走る友達からバトンを渡されて、私は出来るだけ同じペースで走るようにしました。

1・5 km は、楽勝だと思っていましたが、風邪をひいて体調が悪かったのと、なれないバトンを持っていたので結構大変でした。でも、周りを気にせず自分のペースで走り、三番に走る友達にバトンを渡せました。

とても疲れましたが、楽しかったです。またこういう機会があったらぜひ参加したいと思います。

二度目の大会

小松 愛

今年一回目の女子リレーマラソンは、わたしにとって二回目の出場でした。

去年の五月ごろ、わたしは山下さんに一緒にリレーマラソンに出ようと言われました。わたしは家に帰って、

「お母さん、今日芽惟と一緒にリレ

「マラソンに出ないかってさそれたの」

と母に言うとは

「いい機会だし、出てみたら？」
と言いました。

三人一組だったので、わたしのほかに、戸田さんもさそわれて、山下さん、戸田さん、わたしの三人で出場しました。

そして今年。今年もまたリレーマラソンに出ようという話になりました。

しかし、去年一緒に走った戸田さんが、日本に帰ってしまったので今年は船山聖奈さんと三人で走る事になりました。それから、今年は日本人学校からわたしたちも含めて三組、女子リレーマラソンに出場しました。その三組と飯川先生とで毎週月・水・金と練習していました。当日、わたしは少し緊張していました。いよいよスタートの時間です。皆でカウントダウン。

「十、九、八、七、六」

とハンガリー語で数えていました。そして

「五、四、三、二、一」

スタートしました。第一走者のわたしは一生懸命走りました。途中でお腹が痛くなつたけど、歩かずに走りました。第二走者の船山さんにバトンをわたした時力がフツとぬけました。そして、アンカーの山下さんにバトンがわたって、ゴールしました。結果は二一分〇七秒。去年よりも早くゴールすることができたので良かったです。次回もまた走りたいです。そして今年よりタイムが良くなるように練習したいと思います。

来年はもっと速く

山下 芽惟

この女子マラソンリレーは私にとって二回目の出場でした。去年、

日本人学校の中では、一チームしか出場しなかったけど、今年は三チームも出場しました。

今年のマラソンの練習は、学校で月、水、金曜日に学校の周りを三周しました。学校では去年よりも練習していたけど、家ではさぼっていたので去年走ったときよりきつく感じました。なので当日が少し不安でした。

リレーの当日、私はかぜをひいてしまいました。リレーの走る順番はジャンケンで決めて、小松さん、船山聖奈さん、私の順番で走る事になった이었습니다。去年は一番目に走ったので、三番目はなんとなく不安でした。

いよいよリレーが始まります。一番の小松さんがスタートする前、なぜか私も少し緊張しました。小松さんと船山さんが走っている間、ソワソワして落ち着きませんでした。「聖奈ちゃんが来たよ」

船山さんからバトンを受け取るとき、緊張しました。

「このペースをくずさないようにがんばらなくちゃ」

そう思ってたががんばって走りました。と中で苦しくなったので、もうペース落としちゃおうかなと思ったけど、最後まで走りました。ゴールが近づく

「がんばれ、がんばれ！」

と応援の声が聞こえたのでがんばれました。

そしてゴールしました。この時は今まで苦しかったのにとっても気持ちよかったです。

「よくがんばったね。」

みんな言われてうれしくなりました。

走るのはとてもきつい。でも、走った後の気持ちは最高です。来年は今年より速く走れるようにがんばります。

楽しかった

石川 由佳子

私は、この前初めてマラソン大会に出場しました。最初は、出ようか出ないかすごく迷いました。でも一位にならなくてもいいから出てみようということになることができました。

私は、走るのにはけっこう好きですが、別に長距離が得意なわけでもありません。それに今回の大会は大人だって出場するので一位になるかくりつなんて全然ありません。でも私は全然くやしくありません。今回私がこの「女子マラソンリレー大会」に出た目的は一位になることではなく、大会に出てみる、という気持ちがあるか、ということだったからです。

私が今回の大会で学んだことは、「なんでもやってみなければわからない」ということです。走り終わ

った後は「つかれたけど楽しかったなあ」と思いました。最初はすごく迷いましたが出てみて良かったし、すごく気持ちがいい気分になりました。



また出てみたい

小林 亜海

「3・2・1・パン」

私はいきなりピストルが鳴って少しおどろいてからスタートしてしまいました。

私はマラソン大会に出るのは初めてで、走り出す前はともきんちようしていました。けど走っているときはとても気持ち良かったです。順位はわからなかったけれど次の人にバトンを渡すことができました。

また機会があれば出てみたいです。

走り終わった時の爽快感

布留川 麻衣

私はマラソン大会で、一番心に残ったのは、走り終わったときの気持ちよさです。走っていたときは頭の

中では何も考えられないくらい一生けんめいでした。練習のときからずつとがんばってきて、最後まで走ったときにだけ感じる気持ちなのではないかと思いました。

練習は、週に3回、1・5kmを走りました。もつと走れそうだったので、きっと本番は楽だろうと思っていました。だけど、本番になると緊張してきて、走っているとき1・5kmはこんなに長かったかと思っていました。

一度目の折り返し地点を過ぎてしばらく行くと、応援の人たちがたくさん見えてきました。みんなが大きな声で応援してくれたので、その大きさに元気をもらってがんばろうと思いました。

気がつくとなんか抜いていました。私はアンカーなのでがんばらないといけないと思っていました。バトンをもらったときよりも遅くなっているといけないと必死でした。

そして2回目の折り返し地点。そこがゴールだと思い、油断していました。でも他の選手はそこを折り返していることに気づきとてもがっかりしました。

しかしここで力が抜けている場合ではありません。もうひとがんばりです。やっと本物のゴールが見えました。終わりだーと思うとうれしかったです。

大会が終わった後、みんなでアイスを食べる約束をしていました。みんなと食べたアイスはいつも増しておいしかったです。

ゴールの後先生に、「1回目よりも2回目の折り返しの後のほうが顔色がよかったよ」と言われて、なんだか自然と笑ってしまいました。

そして一緒に参加してくれた友達がいってくれてよかったと思いました。

ハンガリー生活の中でも最高の思い出になりそうです。

また出てみたい

橋本 直樹

僕がこのマラソン大会に出ようとした理由は、ハンガリーにも子どもが出られるマラソン大会があることを知ったことと、野球以外の大会には出たことがなかった僕にとって、ぜひ出てみたいと思ったからです。隼也君と優輝君と話し合ってから大会に参加することに決めました。

大会当日、僕は気楽な気持ちで優輝君達とふざけていましたが、一番の優輝君がスタートして走り出した瞬間は緊張しました。

「まだかな、まだかな」

と、ずっと思いながら待っていたら優輝君が来てしまい、かなり驚きました。

バトンをもらい、走り出しました。最初はいつものペースで走っていましたが、途中で違う道に行ってしまうようになりました。でも運良く

係の兄さんに助けてもらえてとてもうれしかったです。隼也くんにもバトンを渡したとき、すぐに時計を見ました。数字を見たときは驚きました。というのも、もっと遅いタイムだと思っていたのが、優輝君とほぼ同じだったからです。その時はうれしかったけれど、よく考えてみると残念な気持ちにもなりました。迷わなければもっと早く走れたからです。二人には気にしなくてもいいよと言われたので何となくうれしかったです。今度また機会があったらまた三人で出たいです。

日本でも走っていた

松下 隼也

ぼくは、日本にいたときも、毎年

元旦に、初日の出を見たあとに走る元旦マラソンというマラソンに出ていました。だから、走ることは大丈夫だと思っていました。だけど、

まだハンガリーに来たばかりで、橋や建物の名前を覚えていないので、道を間違えて迷ったりしないかな不安でした。けれども、走り終わった人に聞いたら、道に迷わないように、ロープがはつてあると言われ、少し安心しました。それから、ぼくは、三番目に走るアンカーなので、ぼくのせいでチームの順位が下がったらどうしようと思い、ものすごくきんちょうしました。

そして、きんちょうが晴れないままバトンを受け取って走り出しました。最初は、抜かされないように、必死でした。でも、大人には抜かされてしまうので、子供を少しずつ抜いて行きました。走っているうちに、最初に抜かされた人がバテていたので、抜き返しました。

マラソンのコースは、ぼくが見慣れない風景ばかりだったので、思ったより短く感じました。しかし、そう感じただけで、やっぱり長い距離

を走ったので、ゴールしたころには、息が切れてしまいました。

でも、道に迷うこともなく、あまり抜かされることもなかったのですが、完走したときには、とてもすがすがしい気持ちになりました。結果は、十四位だったけれど、大人も含めた七十組中の十四位だったので、うれしかったです。

小一のとときから続けてきた元旦マラソンには参加できなくなりましたが、ハンガリーでは、このマラソンリレーを今後も参加していきたいと思っています。そして、今年以上の順位を狙ってがんばりたいです。

次回をもっと上位を

島戸 優輝

同じクラスの女子は、何度かマラソン大会に参加しているようで、五月の終わりのマラソン大会にもチームを組んで走った。僕はマラソン

にあまり興味がなかったけれど、友達に誘われ参加する事に決めた。

去年からヴィラーノツシュの子と一緒に体育をしている。ハンガリーの体育は厳しく、始めに学校の周りを二キロ走る。走っている最中はえらいけど、走り終わった後、達成感もあり気持ちがいい。マラソンに参加することが決まってからは、昼休みにメンバーと飯川先生と一緒に練習した。

当日、ぼく達は、じゃんけんをして走る順番を決めた。ぼくは、第一走者になった。スタート地点に立っているとても緊張しました。盛田さんから、「最初はゆっくり走り、最後の五百メートルのところを力を入れた方がいいよ」とアドバイスをもらった。

いよいよスタートの時がきた。みんな結構速くて、ぼくも一生懸命に走った。途中、疲れてきたけれど頑張って走り、第二走者の橋本君にバ

トンを渡した。へとへとだった。今度は、応援する番だ。応援にも力が入った。松下君がゴールした時、すごくうれしかった。

今回参加するということだけで順位はあまり意識してはなかったが、十四位という結果を聞いてとてもうれしかった。またこのような大会があったらぜひ参加したいと思う。今度は、今回よりももっと上位をめざしたい。



ハーフマラソン完走記

西田 友実

昨年秋に出場したコカコーラ女子一〇kmレースを一時間以内で快走し、次の私の目標は「ハーフマラソン完走」になっていた。そうは決めていたものの、冬の間にトレーニングを怠ったため、ランニングで少しずつ引き締まってきた体型も一気に緩んでしまい筋力も大分落ちてしまった。

体を動かすのが億劫になり、フィットネスジムへも足が遠のいていた。そのような状態のとき、二〇〇七年ブダペストの主なロードレース年間予定が書かれたメールを受け取り、加えてウィーン・ハーフマラソン大会が参加申し込み受付中という知らせにも目が留まった。

「今の状態でハーフなんてとても無理」と思いつつも、興味がてら大会の詳細をチェックしてみた。しかし

大会のウェブサイトを見ているうちに、じわじわとやる気が復活。すぐにインターネット上からエントリーし、ウィーンの手頃なホテルを2泊予約した。この大会はゼッケン等の受け取りを前日に済ませるので、宿泊が必要になる。また私は走り終わった後、少しゆっくりしようと思った。2泊連泊でホテルの予約をした。

大会へのエントリーとホテルの予約を済ませた後、パソコンの前で自分が爽やかにウィーンの街並みを快走しているイメージにふけり、すでに「ハーフマラソン完走」の目標を達成してしまったように感じた。

申し込みを済ませただけで気分を良くした私は、周りの友人たちにウィーンに走りに行くことを意気込んでいると伝えた。しかし反応は、「よくやるね」、「一人で行くつもり？」など、いまいち。「マラソンをしに、女一人で旅に出るのは世間ずれしているのかしら？」と、自分の猪突気味な行

動を振り返ってしまった。その他仕事上での精神的ダメージもあり、トレーニングにもあまり熱が入らず、ハーフマラソン出場への不安が込みあがってきた。

それを解消するために、ウィーンへの準備も兼ねてブダペストで開催されたT・COM二キロレースに参加。私の苦手とする太陽が燦々とする時間帯のスタートだったが一時間一二分ほどで完走し、気持ちを持ち直した。体調も悪くないし、この調子でウィーンへ挑もうと勇んだ。

大会前日、午後に電車でウィーンに到着し、ゼッケンを受け取りに指定の場所へ向かった。その会場はすでにお祭りの雰囲気になっていて、スポーツ用品や栄養食品などのストールが並び、大勢の参加者であふれていた。もう気持ちは高ぶり、大会への期待が膨らんだ。

ゼッケンを受け取り登録手続きがすぐから、連休で賑わっているウィーンの街の観光は控え、明日に備え早めにホ

テルで休むことにした。

当日、ホテルで少し朝食をとり、スタート地点であるウィーン国連都市へ向かった。朝7時半頃だったが、電車は見事にランナーラッシュ。到着したときは、参加者の人数と大会の規模の大きさに圧倒され、妙な緊張感が出た。実際、一万五千人、八カ国ほどからの参加者がいたらしい。

スタートエリアに入ると、大勢の体の大きな西欧人に囲まれ、小さな私は余計小さく感じた。そのような中、そわそわと気持ちが落ち着かずにはスタート合図の待機をしていた。9時にスタートが切られ、人の波ができた後も緊張感はおさまらず、注意力が散漫としていた。とにかく無理をせず、完走することだけを目標にがんばろうと決め、自分のペースを調整した。

ウィーンの街を走るのは予想以上に気持ちよく、爽快だった。コースもとても良い。プラター公園の並木道は本当に爽やかで、まだ朝の清涼感が残ってい

た。公園を抜けた後はドナウ川沿いをウィーンの街の中心に向けて走る。一〇キロほどの地点でリングに入る。大会のために配置されたスピーカーからシュトラウスのバックミュージックが流れ、「音楽の都」を感じられた。普段乗り物が占領している道の真ん中を堂々と走り、そこからウィーンの歴史ある建築物や風景を眺めるのは、とても気分が良かった。それから、ところどころにいる応援者はさらに走者を楽しませてくれた。陽気なバンドなどもいて、飽きることがない。

疲れが出てきたのは一二キロを超えてから。気温も少しずつ上昇し、足が重くなってきた。シェーンブルン宮殿近くが残り5キロほどの地点だったが、その頃は手足もしびれ、1キロ1キロがとても長く感じ、走るのがやつと。でも休むことや歩くことは少しも考えなかった。必死だったのだと思う。

ゴールが近づくにつれ、応援者の数が増え、声援もより大きく派手になってきた。どこの国の人かもわからない人たちが、

小さな日本人の私を応援してくれる。少し恥ずかしいけど、本当に嬉しかった。その応援から元気をもらい、ゴールを指してひたすら走った。

ゴールのゲートが見えたとき、スタートしたときとは違う緊張感が込みあがってきた。ゴール付近のお祭り騒ぎと声援にひたされ、ついに昨年目標にした「ハーフラソン完走」を果たすことができた。

初めてのハーフラソンの記録は二時間一七分四七秒。でもその時は記録なんてどうでもよくて、完走できたことの達成感が大きかった。足はしびれて感覚が鈍り、体はヘトヘトに疲れているというのに、最高にいい気分だった。そして最後までやり遂げた自分に満足した。

あの達成感と充実感を味わうと、参加できたことの嬉しさと、次の大会への参加意欲が沸いてくる。「この感覚が、人をマラソン好きにさせるのだろっな」としみじみ感じつつ、ゴール会場で足のマッサージをしてもらいながら、次の大会の計画を思い巡らしていた。

二〇〇七年ウィーン・ ハーフマラソン参戦記

盛田 常夫

体調が悪いと、気持ちも乗らない。ウィーンへ向かう列車の中で、イエローチップ（タイム測定用個人チップ）を家に忘れてきたのに気づいた。前日から旅行の準備をしていたのに一番大切なランナーの証明書を忘れた。チップのことはまったく頭になかった。会場でチップを借りることができるから、レース出場に何の問題もないが、やっぱり気分が高揚していないからだろうと得心した。

痛風と高血圧

昨年の秋から体に変調があった。走り始めて十分ほどを過ぎると、左鎖骨下の肺の後ろ辺りが重くなり、走り続けることがでけなくなつた。この周辺はスキーで怪我をした箇所

で、二〇年前に鎖骨の亜脱臼、一五年前には肩胛（けんこう）骨裏の腱の断裂で苦しんだところ。一〇年ほど前には鎖骨と脇の間に痛風のような痛みが発症し、「このような箇所にも痛風が出ることもあるか、そうではない場合に何が考えられるか」と日本の医師に電話で尋ねたことがある。症状そのものは4日ほどで消え、痛みの経過が痛風に類似していたから、医者も「腫瘍の可能性もあるが、症状から見て、痛風の可能性が高い。稀に、肩周辺に痛風の炎症が出ることもある」と判断してくれた。健康診断でレントゲン撮影をする際には、左肩周辺に異常がないか診てもらっているが、これまで何も見つからなかった。

今回の場合は痛みというのではない。運動しなければ、何の自覚症状もない。ところが、速く走ろうが、遅く走ろうが、走り始めて十分ほど経過すると、鈍い重みが左肺の裏辺

りも出て、休まないと走れなくなる。いったん休憩して、ゆっくり走ればその後は不快感が解消する。準備運動の不足から来るかと思い、ウォームアップに時間をかけても変化はなかった。

外科的な怪我と違い、こういう内科的な症状は嫌なものだ。もともと、痛風症と高血圧症があるが、きちんと薬を飲んでいない。もしかしたら、静脈瘤か動脈瘤があつてそれが圧迫される症状かもしれない。血圧を押さえれば、症状が緩和されるかも知れないと思い、ここ3ヶ月ほど真面目に薬を飲み続けている。

この間、とにかく脚力の衰えを防ぐために、ランニングマシンの手摺りに片手を添えながら、一〇キロ程度の距離を走るトレーニングをしてきた。血圧降下剤が効いたのか、ゆっくり走れば胸の違和感は緩和されたが、スピードを出したり、手摺りから手を離して走ったりすること

ができなくなった。これまではハーフラソンのレースが近づく、一五キロ走を十本ほど重ねて脚を作ってきたが、今回は一五キロ走の練習ができないまま、レースに向かうことになった。

痛風との付き合い

最初の痛風の炎症が出てから三〇年近い歳月が経つ。私の場合は体質的なものだから、食事でいくら気を遣っても炎症の発症を防ぐことはできない。もっとも、レバー類、とくにフォアグラなど食べようものなら翌日にもう炎症が出るから、食事での節制にはそれなりの効果はある。ここ数年、季節の変わり目、とくに急に寒くなって足が冷えると、必ず炎症が出る。重症の炎症になると、二週間はトレーニングできなくなり、それまでのトレーニングの蓄積がすべてご破算になる。

痛風が踵（かかと）に出ると、歩

けなくなる。踝（くるぶし）に出ると、走れなくなる。膝に出ると、七転八倒しなければならぬほど痛い。痛め止めのヴォルタレンでアレルギーが出てから、極力、鎮痛剤の使用を控えている。どうしても痛みを我慢できない時には、アスピリンを飲む。医者に行けばコルヒチンを処方してくれるが、炎症が出てからこれを大量に服用しても効果がないばかりか、副作用がひどい。だから、コルヒチンは炎症発症の前兆がある時に、1粒だけ飲むようにしている。これは驚くほど良く効くが、コルヒチンは劇薬なので多用はしない。

今年は一月のスキーの後、右足の甲に軽い炎症が出て、それがいつまでも抜けない。走るのに障害はないが、炎症が残ったままになっている。このため、ランニングを始めると、右足甲から臍（すね）に続く腱が硬直する。さらに、右太もも裏のハムストリングから臀部に繋がる腱にも

鈍い痛みがある。もともと膝が悪い左足は何ともないが、右足は自分のものとは思えないほど、二重三重の違和感に満ちている。

胸の痛みに加えてこれである。痛風症と高血圧が連動しているかもしれない。痛風症は腎臓機能に問題があると頻発するし、痛風そのものも腎機能を弱める。腎臓機能が弱いと、それをカバーしようとして血圧が上がるという連鎖反応が起こるようだ。それにしても、やっかいなものを抱え込んでいる。

ウィーン・ハーフラソン一週間前に、T・C O M 一五キロ走があった。本来なら、ここで全力走のタイムレースをして、ウィーンへ向かう予定だった。だが、今回は無理せず、とにかく現在の体調でどれだけ走れるのか、走ってみて胸の差し込みがどれほど強くなるのかを確認するレースになった。ところが、2キロも走らないうちに右足の硬直が始まり、

足が前に振れなくなった。スピードが出ていないので、胸の差し込みはほとんど感じなかったことが収穫だった。やがて走っているうちに臍(すね)の硬直がとれ、後半の六キロは前半より速く走れ、一二キロを五四分四〇秒ほどで走りきった。今年の記録は2年前に比べて5分も遅い。タイムに満足できないが、これならハーフマラソンは行けるだろうと安心した。ハーフマラソンの走力に換算して、5キロ平均二三分程度で。

膝の痛みとどう付き合うか

左膝には古傷がある。一九九〇年に合計6度、溜まった水を抜いてもらった。最初はたんなる疲れで、ほんの少しだけ水が溜まったものだった。この状態なら、クロールで泳げば膝関節が緩んで水が吸収されるし、軽くジョッギングすることでも症状が緩和され、早期に回復する。ところが、当時はそういう知恵がなく、

行きつけのマッサージに頼った。迂闊にも、事前に膝の不都合を知らせるのを忘れた。マッサージ師は曲がりの悪い膝を力一杯、背中に押しつけた。「あつ」と叫んだが、遅かった。溜まった水が膜を破ったのか、軟骨に傷が付いたのか、次第に膝周辺が膨らみ、夜にはパンパンに膝が張ってしまった。こうなると、歩けないのはもちろん、じっとしても痛い。翌朝に、床を這って隣人の医者に助けを求め、大学病院の専門医を紹介してもらった。

それから半年の間に、ハンガリーと日本の病院で6度も水を抜く羽目になった。そのお陰で、医者の方量の違いが良く分かった。同じ外科でも、膝専門の整形外科医でなければ、溜まった水もきれいに抜くこともできないのだ。セーメルワイス大学付属の整形外科病院で、膝専門の医師に初めて膝の水を抜いてもらった時には、小さな注射器で手際よく抜い

てもらい、ほとんど痛みも感じなかった。ところが、ヤーノシュ病院の救急外科の医師は、麻酔した上に、浣腸用の太い注射器で水の在りかを探りながら吸い出し、さらには石膏ギプスで足を固めてくれたものだ。この処置には腹が立ち、家に戻ってハサミでギプスを切り裂いた。日本でも日赤病院でこれと大差ない処置を受けた。

医者に診てもらう時は、本当の専門医でないと、かえって悪くなるから診てもらわない方が良い。これが教訓だ。肩胛骨の裏の腱が切れた時も、病院へ行っても無駄だと思ったが、心配した同僚が無理やり当地のスポーツ病院へ連れて行ってくれた。しかし、案の定、「スポーツ選手なら手術しなければならぬが、そうでなければ処置のしようがない」という診断だった。半年は左腕を上げることができなかった。今でも不都合がある。テニス肘でも、高々ステロ

イド注射で診療は終わるから、病院へ行っても早く治ることはない。スポーツから生じた通常の故障は手術を要するもの以外は、病院へ行っても気休めにしかない。だから、私は余程のことがない限り、病院へは行かず、トレーニングの仕方を変えたり、マッサージ、湿布薬、温泉療法、水泳療法などを織り交ぜたりして、故障を直すようにしている。

過去最低記録

今年で長距離走を始めてまる4年になるが、故障のない状態でレースを走ったのは数えるほどしかない。しかし、今年は胸の痛みで、もう長距離は走れないかも知れないと思ったが、何とかウィーン・ハーフマラソンは走りきった。今度だけは、どれほどのタイムで走れるのか、見当がつかなかった。走るなら、それなりのタイムで走りたい。どんなに悪くても、百分は切りたい。膝を痛め

てほとんど練習できなかった昨年のプラハ大会が九六分、一三キロ地点で係員と交錯して脹ら脛の痙攣に見舞われながら九八分でゴールしたブダペストの初ハーフマラソン、この辺りが目標になった。一週間前のT・COMレースのタイムからみて、これが現実的な目標だろうと考えた。昨年のウィーンでは一五キロ地点を六六分一二秒で通過した。ほぼ五キロ二二分平均である。今年の一五キロのスプリットは六九分二〇秒だった。昨年に比べて、5キロ平均で1分ほど遅い。ここまでは何とか予定通りのペースを保ったが、後の6キロは足が動かなかった。明らかにトレニング不足である。最後の6キロ（正確には6.096km）に三〇分近くもかかってしまった。昨年はここを二六分四〇秒で走っている。とくに最後の1キロ（正確には、1.096km）を四分二五秒で締めたが、今年はこの区間だけで1分も遅かった。

た。マリアヒルファアの下り坂でスピードを上げようと思ったが、足が思うように動かない。スピードを上げると胸に痛みがくるので、無理せず流した。記録は過去最低の一時間三九分一七秒、六二二位だった。

倒れることなく、無事ゴールしたことを喜ぶべきだろう。ただ、気がかりなのは、もう昨年の自己記録を超えることはできないのか、それともまだ復活の可能性が残っているのかである。

今年のウィーンは昨年にも増して、街の応援が凄かった。オペラハウス前にも観客スタンドが設置され、道路に迫り出た応援者で道幅が狭かった。ウィーンのコースは走り易いし、市民が挙げて行事の成功のために協力している。こういう気持ちの良いコースで来年も走り、体調を取り戻して年齢別グループでトップに迫りたいものだが、果たしてどうなることやら。

ソフトボール大会

大善戦、大使館チーム

戸田 公司

「目標は優勝」と大言壮語して臨んだ今回のソフトボール大会。しかし本音のところは、一回は勝ちたいなあ。ハンガリーに赴任して3年、私にとって今回が6回目、最後となる大会だが、これまで2回戦に進んだのが最高だったので、多少の気合は入っていたものの、あまり勝敗にはこだわらず、楽しむことが最優先。2試合戦う中で、如何に参加者全員が不満なく出場できるようにするか交代時期を考えていたが、まさか4試合戦うことになるとは想定外。

初戦の日本中学校戦も序盤からリードされ苦しい展開になり、今回も

初戦敗退かと思っていたが、中盤に大逆転して勝利。そのままの勢いが続いて、2回戦のマジャールズズキ戦、準決勝のサンヨー戦も無欲のうちには不思議と勝ってしまった。決勝戦は対アルパイン。ここまで来ると実力差はあるとは分かっていたても、つつい欲が。そのせいか、初回から大量点を奪われてしまい、やはりここまでかと思ったが、中盤以降徐々に追い上げ、最終回にはこちらも大量点を奪い、1点差でなおもワシアウト2塁3塁で上位打線。あと一打、これはいけるかも、というところまで来たのだが惜しくも力及ばず準優勝。それなりに満足はしているも非常に悔しい準優勝となってしまう。

私が出場した6回の中では、今回特に戦力が充実したわけでもないのだが、なぜここまで来られたのだろ

う。おそらく、適材適所に打順・守備位置が組めたこと、チームが一体となつて戦えたことが大きな理由なのだと思う。ホームランも4試合戦つて一人（私ではない）しか打っていないのだが、それでもうまく打線がつながって得点能力も高く、好守備も続出したので、これはオーダーを組んだ自分を自画自賛。やはり野球（ソフトボール）は打順や守備にそれぞれの役割があるのだなあと再認識。また、少しばかりの間（約一週間）ではあるが、勤務時間終了後、都合のつく者のみで練習し、技術の向上がどれ程あったかは分からないが、チーム全体の士気が高まっていたことも見逃せない。個々の能力も重要だが、チームワークも十分生かされたのだろう。

しかし、ここまでくれば最後も勝ちたかったなあ。普段はソフトボ―

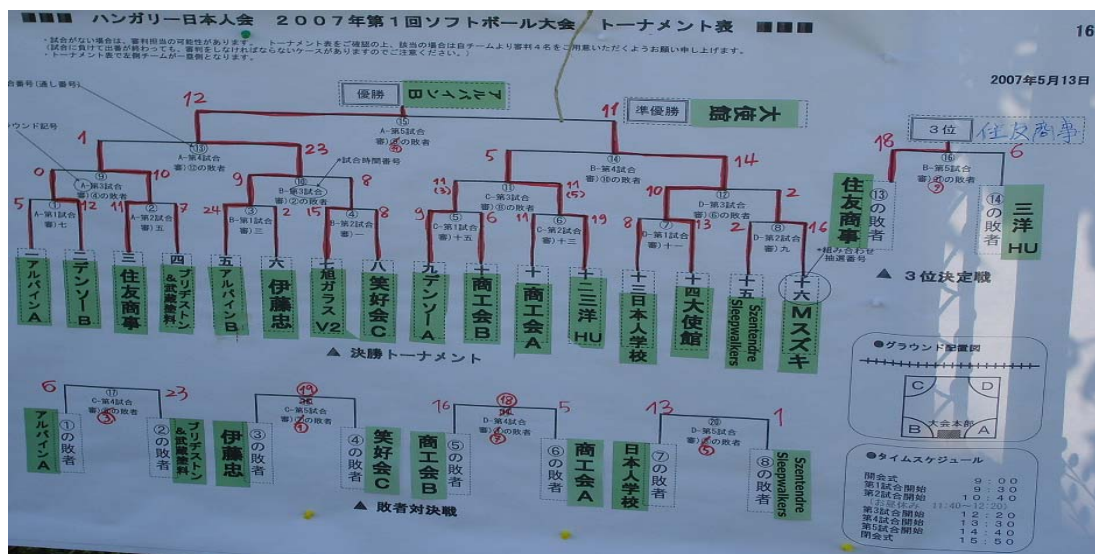
ル大会が終わった日は、疲れてしま
って十時間ぐらいいは爆睡できるのだ
が、今回はあまりに悔しくて、夜も
ろくに眠れなかった、ほんの8時間
ぐらいしか。

さて、私は本号が刊行された頃には既に帰国しており、今回が最後の大会だったのだが、優勝という課題が残ったので、それは他の大使館員の次回以降の活躍に期待。開かれた大使館なのは当然だが、ソフトボー
ルだけは強くてなかなか手の届かない大使館、打倒大使館というの
いのでは（だめかな？）。

最後になりましたが、我々にちよ
っとしたヒーローになり得る場（今
回は惜しくもなり損ね）を提供して
いただき、本ソフトボール大会の開
催にご尽力された関係者の皆様に感
謝するとともに、今後の日本人会
ますますの発展を心よりお祈り申し

あげます。また、今回は青年海外協
力隊員の指導するセンチンドレの女
子ソフトボール（一部男子野球の助
っ人）チームから出場の打診があり、
日本人会事務局に相談したところ、
いろいろと議論はあったと伺ってい
ますが、最終的に快く受け入れてい
ただいたことにも深く感謝します。
これを機に一層、日本・ハンガリー
間の交流についても深まっていくこ
とを日本から願っています。
さようならハンガリー、でもまた
いつか観光で来ます。

優勝 アルパインB
準優勝 大使館
三位 住友商事
四位 三洋ハンガリー
MVP 鈴木雅教（アルパインB）
ホームラン賞（4本）
森本 様（旭硝子V2）



日本人学校

小林研一郎先生来校

三代 喜政

昨日（五月一日）、小林研一郎先生が学校にお出でになりました。校歌の作曲者としてのお名前を子どもたちは存じていますが、実際にお会いしお話を聞きするのは初めてでした。玄関をお入りになると、中学生が「こんにちは」とお出迎えをしてくれました。そして、そのまま用意していた椅子のところに行列、子どもたちの集合を待たれました。

学校から簡単にご挨拶とご紹介をし、校歌を聴いて頂きました。「とても上手に歌ってくれたけど、こんな風にしたらもっと良くなると思うよ」とご指導をされますと、とたんに子どもたちの校歌もぐんとうまくなったような気がしました。校歌の

指導の後は、子どもの頃の思い出などお話を聞きました。

そして、「みんなの夢は？」という質問に、いろいろな答えが出てきました。時には子どもたちを前に出して、質問されたり、こんな風にしたらいよいよ指導されたりしました。あつという間に時間が過ぎていき、最後に児童生徒会長からお礼の挨拶をし、花束をお渡ししました。

先生もとても喜んでいらっしかったです。世界の小林先生と直にお会いし、お話を聞きました今日の経験は、きっと子どもたちの心にいつまでも残ることでしょう。

先生、ありがとうございました。



第十話

フグ

岩井 孝博

ポンポコ・スッポン
ポンポコポン
ポコポン・ポコポン
スッポンポン

フグ食うと、フグ死ぬぞ……。なん
ていう駄洒落はお遊びとしましても、
ま、御経験のある方は少ないと思ひ
ますが、フグ毒を少しだけ舐めてみ
ますと、歯医者さんで麻酔をされた
時の様になるんだそうです。

口の周りが、なんとなくだらしな
くなってるような気がする、あれ。
ところがフグ毒はさらに、ノドへ
行き、気管支へ、そして肺へいき、
肺が利かなくなってしまうんだそう
です。

フグの刺身を俗に鉄刺。
ちり鍋を鉄ちり。

なんて言いますが、これは鉄砲を、
撃てば当たると言う事から、フグを
食えますと毒に当たる、と言う事を
かけているわけでした、それで、鉄
砲の鉄を取って、こう言うのです。

ですから、役者さんなどは、役が
当たると言う縁起を担ぎまして、講
演前に召し上がるのだそうです。

あの、有名な歌舞伎の板東三津五
郎さんも、其れで召し上がったので
したが、量が多かったようで、本人
には気の毒とは思いますが、板前さ
んが可愛そうでした。

有名な俳諧の人は、フグを食わな
きゃ一人前じゃないなんていつてお
いて

「俳諧のために河豚くう男かな」
(虚子)なんて皮肉っています。

「フグは食いたし・命は惜しい」な
んて川柳が有りますが、正直でいい

です。

知ったかぶりに、素人さんがやつ
てはいけません。

フグ毒の名前をテトロト・トキシ
ンと言うのだそうですが、無色透明
無臭と来ていますから、始末が悪い。
ですがあ、真水では洗い流せます
から、ああそうですかとありますが、
安心は出来ません。

毒の強度はマウス、あのネズミで
測るんだそうです。

一グラムの毒で、二十グラムのネ
ズミが死ねば二十マウス、十万匹死
ねば二十万マウスといつて、毒を二
〇グラム食べると人間は死ぬのだそ
うです。鮪の刺身が一切れ約十グラ
ム、二切れでハイ・サヨナラとなる
んですから。

いきがってフグの肝臓とか卵巣、
目など、血の気のある内臓には絶対
に手を出してはいけません。ですか
ら、フグを調理するには国家試験が
あるわけです。

一匹のフグを二十分で、五臓六腑を切り分けるわけです。この二十分には色々わけがあつて、お客様が待てる限度とも、あるいはフグ毒の見分けの速さを見るときも言われています。

さてグミ助、こうしたことあはしたことを勉強しまして、久次郎親方から頂いたフグ庖丁を携え、今日がその試験日。

ガム公が付き添ってきました。

「指切るなよ、試験はペケでも仕事は出来るが、指切った日にや、明日の仕事に障るからな」

「ん：」

「出刃ってなアな、出歯って言うくらいだ。噛み付かれたら傷は大きいぞ」なんてガム公が歯をむき出したりしながら、二人で試験所に来ました。

板前さんと言うのは、調理場に入りますと、威勢が良いのですが、どうもこの、外に出ますってエと、借り

てきた猫のようになるようで。おとなしい。

それでも、刃物所持公認なもんですから、いかにも人相が悪い。

眉毛のない人。

妙に青白い顔の人。

半顔崩して鼻で笑う人。

猫背で、顎をしやくる人。

ズボンのポケットに手をつ突っ込んで肩をすぼめ、天を見上げている人。

「お兄さん、ちよつと失礼いたしやす」って言いたくなるような人ばかりが五、六十人。

この板前さんが調理場に入りますと、コアラかパンダにでもなったように愛想がいいのですから、憎めない。

まずは筆記試験。

次が五種類のフグの鑑別。

最後が除毒調理。

ガム公は、いても仕方ないので、近くでお茶でもと思って試験所の外

に出ると、チョコ坊が向こうから来ます。

「あれ、どうしたい」

「どうもしないけど、近くまで来たから、ついでよ」

「そうか、丁度良い、コーヒースるか」

「あら、いいわね、たまには外でつて言うのも：」



「いきなり若返るんだな」

「フフ、照れてんのね」

「：・カラカイやがって、じゃ止めるか」

「意地悪、嫌い」

「はは、悪かった、謝る、謝るから、出して」

「なにそれ、ったく、分かっているわよ」

とかなんとか、いつものことながら戯れながら入った喫茶店。なるほど、受験する板前さんと来た方々が一杯。難しい顔で、腕組みをしている人、先輩でしょう。ガム公、昔を思い出し、親方もこうしていてくれたんだな。

グミ助のために、俺は来てよかった。そう思いながら、腕を組んで目を閉じます。

チヨコ坊、気にもしないで

「ねね、何頼もうかしら、もうすぐ冬ね、寒いから、ココアにしようかしら：・」

言って、ヒョイと前に座っているガム公を見ますってエと、眠っている。まア、寝つきのいい人っているもんです。座った途端にもう、寝ちゃうんですから。

チヨコ坊、呆れながらも、添い寝してあげようか、なんて思いますが、ここは日本、そうも行かない。

仕方ない、どっかで買ひ物でもと、出て行ってしまいます。どなたでも一度は御経験がおりかと思ひますが。

高級喫茶店で、微かなクラッシック音楽を聞きながら、ソファでうたた寝。ガム公、ふっと目を覚ますと、チヨコ坊がいない。さてと、思ひながら手を頭にやった。

その手を、冷め切ったコーヒーに手を伸ばす。と

「：・なにか？」とウェイターが来た。

「ん、あ、勘定」

「お済みで御座います」

「そ、そうか、なら、いい」

こうした店では、ちよつと手を上げただけで、すぐ誰かが飛んで来る。サービスが行き届いています。

何はともあれ、ガム公これで一安心。何せ、チヨコ坊を当てに生きていますから、お金はいつもゼロ。オケラ。男冥利とは言え、こういう時は、下手をすると、動けなくなりま

す。
さて、そろそろ、フグ試験が終わる頃。

ガム公、ふらりと店を出ると、向こうから、グミ助が、ニコニコしながらやって来ます。

その日のうちに発表があり、見事、グミ助は合格。

さっそくチヨコ坊の家で乾杯。

「よかったな」

「ん、兄イのおかげだよ」

「ねね、友達の誕生日に、腕振るってもらおうかしら」

「いった」

「明日」

「急だな、何人」

「内輪で、四・五人よ」

「何歳の人」

「クラスメイト。バカ」

三十路も、中を過ぎますと、やはり言いたくはないようで

グミ助、クスつと肩をすくめ

「そうか、よし、早速帰って準備だ」

「お、いいぞ、気合、入ってる」とガム公、立っていくグミ助の後姿を見送ります。

誕生会。場所、勝春。肌艶のいい女性がやってきました。

皆それぞれ、流行のブランド物を身につけておりますが、浮かれた派手さがない。

さすがに年の功。

お話が始まりますと、やはり女性、華やいでまいります。

周りに居ましても、なんか、こう、

ウキウキしてきました、ああ、敵わない。店の若い女性を連れ、グミ助が挨拶し、女性が甲斐甲斐しく料理を運び始めます。

まず、ヒレ酒で乾杯、煮凍りの突き出し、白子焼き、鉄刺の鶴、ダイダイをベースにした柑橘類に、昆布や鰹のだしが利いてるポン酢で召し上がる。

そして鉄チリ、葛きり、切り餅も添えてあります。

華やいだ誕生会、溜息混じりに、歳の話になります。

そこに、さっきの若い女性が、お酒のお代わりを運んで来た。

すると誕生会本人が彼女を見て

「いいわね、若いって」

と言うと若い女性、冗談のつもりか

「ああ、あ、私も来月、誕生日、二十一、もうフグお婆ア、になっちゃう」

その場が「……」
やれやれ、そろそろイップク
あらドッコイ。

——おわり——

今回を持ちまして閑話一服「流れ板」シリーズは終了いたします。

次回第十一話「なまえ」四人が登場してお笑いを誘う予定です。

宜しくお付き合いの程を、
お願いいたします。



「ドナウ通信第 72 号」(2007 年夏季号)

発行者 ハンガリー日本人会

発行年月日 2007 年 7 月 15 日

発行代表者 田路 亮三

編集責任者 盛田 常夫

表紙デザイン さくらデザイン (Inner Design Bt.)

1021 Budapest, Bogár utca 7

写真・裏表紙デザイン Kármán Studio Bt.

日本人会事務局 連絡先

Magyarországi Japánok Szervezete

TEL/FAX: +(36-1)373-0400

1054 Budapest, Zoltán u.13

P.O.Box: 638 H-1365

E-mail: nihonjinkai@nihonjinkai.hu

ドナウ通信編集部

TEL/FAX: +(36-1)361-4469

E-mail: morita@tateyamahu



July

S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

August

S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

September

S	M	T	W	T	F	S
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23 ₃₀	24	25	26	27	28	29